



民間の敬語生活とその改善

—「マシねス」の意識をマシム—

藤原 與一

民間日常の、口ことばの言語生活では、ものを言えば対人表現になる。人と人とは、なんらかの社会的な関係をたもっている。そこで、対人表現は待遇表現になる。

民間の言語生活を観察する時、この待遇意識は、わけても注意すべき、言語意識の主流と見られる。

人を待遇する場合、意識のよりつよくはたらくのは、かりに上下の言いかたをすれば、「下」にむかってよりも、「上」にむかってである。そんな言いかたはほとんど衝動的にやっているが、そんないではいけない場合になると、気をつかう。その気をつかいたは、「ていねいに」ということである。

古くからの民間のしつけに、「もつとお行儀をよくしなさい。」とかもつとていねいにものを言いなさい。」とかいうのがある。「お客さんになんということを言うんですか。もつとていねいに言いなさい。」と、よく言われてきた。これは、全国にわたる、伝統的な通念であると思う。

さてその実際の場合を反省してみるのに、また観察してみるのに、言うところの「てい

ねい」は、今日文法家の説明する「尊敬法・謙讓法・丁寧法」の、三分法の中の「丁寧」にとどまっていはいない。「ていねいに」ということばのつかいかたは、広い。これを「鄭重」と言いかえると、いくらか実際に近くなるのを感じる。「ていねい」意識には、尊敬（尊重）意識も謙讓意識も含まれているのである。民間の敬語生活は、広い意味の「ていねい」意識を軸として廻転しているとも言えることができる。敬語の世界は「ていねい」意識の世界なのである。

二

いわゆる丁寧法の、「ます」「です」類の言いかたがよくおこなわれることは、右の事情から、当然とされよう。ここで特に問題としてよいのは、謙讓語・尊敬語も、「ていねいに」との意識のもとに使用されている事態である。

(1)

電車内などの掲示を見ると、よく、「御用の方は車掌にお申し出下さい。」とある。サービスをむねとするがわが、乗客を見下げた、「申し出ろ」と言うはずはない。真意は

「おっしゃって下さい」というようなものであろう。それを表現しようとして、「お申し出で」の文句をつかったのである。これは、理をかんたんに通して言えば、謙讓語の乱用である。しかし、その表現意図に即応して考えるかぎり、これは一種の丁寧表現と考えられる。つまり、ものを「ていねいに」と考えたのが、こうなったのである。

「失礼申し上げました。」というあいさつことばを、このごろしばしば聞く。「いたしました」でよいような時に、こう言う。こういうことがおこり得るのは、「申し上げ」を、もつぱら「ていねいな」言いかたとしてとりあげるからであろう。「ていねい」意識のもとに、——「ていねいに」言おうとして、「申し上げ」はえらばれたと解される。方言上では、九州南部地方の「モス」（申す）が、

○ツゲンチャイモシ列カ。

そんなでありましたか。

のように、いわゆる丁寧の「ます」に等しい「モス」になっている。

相手に「ていねいに」ものを言おうとすれば、よいことばをつかおうとする。謙讓のことばはたしかによいことばである。（謙讓の気もちを十分に表わすのに、有効なことばで

ある。このことは謙讓でも、「ていねいさ」を表わすのに有効と思われれば、これは、けっきょく「よいことば」とされて、その「よいことば」が、「よい」ということを契機に、他に転用される。利用され活用される。(註)

——一方から見ればそれは誤用であっても、当の言主としては、ひとえに「ていねい」の意識のもとに、それを丁寧表現としていのである。個人のこういう表現行為が社会の共感をよぶ時、あるいはまた、社会の「ていねい」意識が自然にこういう丁寧表現化の傾向を馴致する時、丁寧表現化の傾向は、丁寧の表現法となり、謙讓法の「丁寧表現法」化が見られることになる。

註 近ごろ、金田一春彦氏の「敬語の正しい使い方」(ことばの研究室IV)を拝見することができた。右書八〇頁に「その改まった言い方だという感じが、尊敬した言い方という感じにすり代えられるんじゃないでしょうねえ。」とある。

先人の功績をたたえるあいさつで、
○何々賞を受領いたされまして
などとすることがある。先人が、その席一同の等しく尊敬する人である場合、「いたす」

は使いすぎである。言主、自分が、平素「ていねいに」言う場合は、充実した気もちで、「いたす」などをよくつかうので、ここのはりきつた気もちの場合も、その「よいことば」が、おのずと口をついて出てきたのである。よく言えば、自己を投入した表現である。が、投入も場ちがいと言うほかはない。

似たような例に、
○あなたのおはがきは、きのうまいりました。

などがある。「あなた」のことなら、「まいりました」と言わない方がよい。しかし、それをあえて言うのは、「まいる」という謙讓語を、その時の「ていねいな」表現の料につかったわけであろう。方言によれば、「御念がいりまして、どうもありがとうございます。」という時に「ゴネンノマイリマシテ、……。」などと言うのがある。「まいる」を単純に丁寧表現につかうことが習慣化している。

「御了承下さい。」と相手に言うのも、「承れ」とは変であるが、じつはこれも、「ていねいな」もの言いとして、つよい習慣になつていると見られよう。このような類例からすると、さきの「いたされまして」も、その丁寧表現の意図はよくわかる。

*
かつてラジオの放送討論会で、司会者のことばに、

○みなさん。よくおいでイタダキました。というのがあった。これを聞いていた私は、聞きつつ、「よくおいで」のつぎには、「クダサイました。」がくるのかと思っていた。ところが、「イタダキました」におちたのである。「イタダキ」のこのような登場には、この際、「ていねいに」言おうとする意識が支配的であったことが考えられよう。「イタダキ」をここで取り出した心理は、想察にたかない。

(2)
尊敬法の言いかたを丁寧表現法にしている事実が指摘される。尊敬語を、「ていねいに」のつもりで、自由につかいひろげている。

*
広島地方でよく聞かれる例であるが、「居ってチャ。」(居られる。)式の尊敬法を、しばしばつぎのようにもつかう。

○まあ、すみません。この子はすぐに泣いてんですよ。

「遊んでいた子がころんで泣く。隣家の主婦が助けおこす。子の母、

右のように言う。

「泣いてテンです」は「泣いてのです」で、「泣いての」の「泣いて」は、「泣いてデチャ」の「泣いて」と同じである。つまり「……ての……」も尊敬表現法なのである。では、右の例は、隣家の主婦の前で、わが子を尊敬してだろうか。そうではなくして、これは、その場を「ていねいに」言っているのである。ここに、尊敬法は、丁寧表現法化している。

山陽地方などになりいちじるしい、
○うちのお父さんが言うチャッタよ。

Ⅱ言うてチャッタⅡ

などの言いかたも、「チャッタ」で尊敬を表わしたというよりは、「ていねいな」もの言いをしたと見るべきものであろう。

○うちのお父さんが言うようラレました。
のように、「レル・ラレル」敬語も、同地方では、よく身うちにつかわれる。これも、同地方内のこととしては、「人まえにもかかわらず、身うちの者を尊敬した」などと批評されるべきすじあいのものではないようである。ごくかるい気もちで、この言いかたはなされている。ある一人は、

あんまり尊敬ではなくても、「行キヨラレル」など、「レル」をつかう。

と反省して述べた。場に合わせて、表現をすこし「ていねいに」しようとする時に、「レル・ラレル」が用いられるようである。つまりこれも丁寧表現法なのである。それがかなり強い習慣になつていいる。北陸能登出身の斯波六郎博士からも、

富山のくすりうりが、「来ラレー」など
と言うので、「つけいに思った。あれは、
尊敬というよりも、「ていねいな」気も
ちだな。

とのおことばを得た。

*

低い敬意の表現法は、丁寧表現法に移行しやすくはないか。「レル・ラレル」の言いかたは、そういう類のものかと思う。

「お行きなさい。」「お行き。」につらなる表現法「行きー。」も、元来は尊敬の表現法とすべきものであろう。が、近畿四国地方のこの用語法の実際には、一種の丁寧表現法とも言えるものがありはしないか。

*

近来、「失礼申し上げました。」とともによく聞かれる、

○おかわりイラッシャイませんか。

ⅡございせんかⅡ

では、わざわざ「イラッシャル」という尊敬語がつかわれている。これは、できるだけ「ていねいに」言おうと思ひ、相手の、「あなた」を意識して、「イラッシャル」と、尊敬の言いかたをしたものか。そうだとすると、これの機械化した表現——機械的なあいさつ——には、「イラッシャル」をただ「ござる」の代用につかっているだけかのような気味が感じられる。いわば、「イラッシャル」をもつて、丁寧表現法を新鮮にしたかのようにうけとられるのである。いずれにしても、ここに「ていねい」意識が顕著であることは、みとめることができる。

かなり高い敬意を表わすことばも、丁寧表現に利用されるようである。

「ヤル」尊敬語に「ます」のついた「ヤンス」は、「ヤス」とともに、よく丁寧語にもなっている。Aついでながら、「ヤンス」同様、「ます」の熟合のすぐに推測される「ンス・サンス」は、尊敬表現法ひとつにつかわれている。V

親は子に、人はまたいわゆる目下の者に、「どうどうオシナサイ。」などと言う。「ていねいに」との気もちから、高い敬意を表わすはずの尊敬表現法を、とり用いているのであ

る。

三

「ていねい」の表現は、個々の現場で、随時によくおこなわれている。よくおこなわれるものが、やがて社会の言語習慣となり得る。はじめは、よし悪用と見られ誤用と見られるものでも、いつしかそれが世上の習慣となつて、自然に固定することがあり得る。「関係敬語」と言われるようなもの、たとえばこちらが先方にする返事に「お」をつけて「お返事」と言うのなども、「お」が丁寧表現法として固定したものと見ればよからう。

丁寧表現法は、国語の、一つの歴史的方向と解されるのではないか。今の「ます」も、「まつする」「まらする」などとさかのぼれば、謙譲の「参らする」に到達する。「ございます」の「ござる」も、もともと「御座ある」という尊敬語法である。玉上琢弥氏の「敬語の文学的考察」（国語国文二七年三月）には、

「尼君」という言葉には敬意が感ぜられるが、この人については「御」も「給ふ」も見られないから、所謂敬語というよりはむしろ所謂丁寧語の方向と見るべきで

ある。
とある。

四

「ていねい」の意識は歴史的なものであつて、根柢よいものかつ、広くしみとおつたものであることがわかる。

しかし、今日の国語生活上の新しい要求、——明日を目ざしての日本語生活の合理化ということからすれば、この「ていねい」意識の活動も、ただにこのうごきのままに放置しておけばよいというものではないとされる。「ていねい」の意識そのものはとうとうとしても、その発動は、時代の要求に応じて、適当に吟味してみなくてはならないと思う。

敬語は国語生活の中のものである。将来の国語生活、ことに日常対話の生活が、今後はますます、たがいの人間の実質をみがきあうものにならなければならないとすると、敬語の生活も、よく実質を重んずるものにならなくてはならないと思う。人を尊敬するとすれば、その人の実質を見て尊敬するのである。やさしいもの言いをするとすれば、その人の実質を高める心で、やさしく言うのである。このように、「実質の敬語生活」を思えば、

第一に、習慣的な「ていねい」過剰は、自戒しなくてはならないことになる。——目前の相手に、第三者をかたるのに、第三者への敬語をつかうわずらい、あやまって自己へ敬語をつかうなどの時は、「ていねい」意識過剰の行きなやみが見られる。

「ていねい」の意識はまことにすべての敬語法にしみとおつていられるものであるけれども、ひたすらていねいにといいのは、みずから、「ていねい」意識のとりこになったものである。何のためのていねいか、これをつねに考えなくてはならない。

*

実際には、「尊敬語」「謙譲語」を、「丁寧語」につかうことを、なるべく節制すればよいのだと思う。「みんなでいたしましょう。」と言つた時の「いたす」が、もし単純に「丁寧語」としてつかわれたのなら、これは「いましょう」でよいのではないか、というのである。「いっしょにまいりましょう。」も、「行きましょう」でよいことが多いと思う。「みんな」とか「いっしょに」とか、他と自とがともにふくまれる場合は、なおのこと、「する」「行く」の言いかたでよからう。「謙譲語」を「丁寧」表現に用いる場合がこ

とに多い。この点で、「謙讓語」は純粹の「謙讓表現法」に用いることにつとめ、「丁寧」表現にはこれを流用しないという考えかたが、原則としてたいせつであると思う。

「尊敬語」を「丁寧」表現に用いる習慣は、共通語においてよりも方言において、比較的良好に見られようか。ところで、先日はラジオで、つぎのような例が聞かれた。

○コノ タテモノワ、センサイオ ウケラ
レタンデス カ。

「これに対する答には、「ゼンシヨ
IIイタシマシテ」があつた。」

「建物は」と言っているが、「受けられたんですか」と、尊敬の言いかたをしている。相手に対する敬意が、このように、「建物」を主部とした叙述においても、尊敬法をよびおこしている。隠在の「あなた」が、敬意を受けるべき当体だと言えはそれまでであるが、すつきりしないことばづかいだと言えよう。

ことがらを言つても、人に関係づけて表現するところに、日本語の特色がある。人に関係づけられ、「ていねい」の意識がはたらく。

この点では、「受けられたんですか」の「られ」も、もはや、しいて尊敬表現法として追求するまでもない程度のもの、丁寧の表現と

も解し得ようか。

いずれにしても、いわゆる尊敬語・謙讓語を、丁寧の表現に転用すれば、ことはわずらわしくなる。いわゆる目下への丁寧表現など、善意の生き生きとしたものは何よりとうといとしても、形式化した慣用のものは、今日、その実質を検討してみる必要がある。習慣の句法は、一方、それとしてみとめるべきでもあるが、他方、これをたたいてもみなければならない。

ごく一般的なこととして、もつともかんたんなことを言えば、「丁寧」の表現には、かぎられた丁寧語をつかうのとどめるようにするのがよいと思う。

*

丁寧語「ます」「です」をつかうとしても、その過剰には用心したい。「ありますです」の類は、論じるまでもないことである。日本語のつねとして——日本語の構造・表現法の特質からして、こんなに累加のおこるのはむりもないことであるが、これではあまりにくどくどしい。やはり「ていねい」意識の過剰と言えよう。

「このあいだお借りしましたあの本は、ずいぶんおもしろうございます。」などの、文中の

途の「ます」は、はぶいてよいのではないか。

「ます」の心意は、ひとえに文末の「ます」に託すことにしてである。「ありましたそうです。」も、「あつたそうです。」にしたらと思う。「店の者がおうかがいします、すはずですが。」は「……おうかがいするはずですが。」でよいと思う。

もつとも「ええ。私もきのう出あいました、ずいぶんしよけていました。」などの時は、文が前後の二部分に割れているので、前半にも、「ます」があつたのがよからう。前半の「ます」をはぶいたのでは、ここの文表現全体の調子は、ちぐはぐなものになる。このことは「です」の場も同様で、一般には、「……だが、……です。」とはならない方がよいと思う。さて、「ずいぶん待ったんだが、いつこうに來ないんですよ。」などは、どうであらう。

「ます」「です」は、今日通用のだじな敬語である。これらの役わりは、きわめて大きい。それだけに、上述の趣旨から、「ます」「です」の用法を明確に規定することができたらよいと思う。「ます」「です」の乱用が、「オ」の乱用と同じようになってはいけない。

*

さきには、「建物」について「ラレ」敬語をつかつた場合をあげたが、事物なり状態なりを、人から切りはなして考え得る場合には、つとめて、敬語を節制したのがよいと思う。つまり、事物・状態に関しては、「人」の方へ引きつけないで、そのものをそのものとして、そのことをそのこととして表現する

のである。そうすれば、非実質的な敬語法はおこらないですむであろう。例の、「だれだれさんは何々であらして」という尊敬の言いかたは、「ある」という、存在を示すことばに、「レ」敬語をつけたところに、問題がある。

五

現代の敬語生活の改善の一方途としては、

「ていねい」意識の生態を見きわめることが肝要であろう。そうして、さかんな「丁寧」表現法の実情を見定めて、ここに、「ていねい」心意の活動を穩当に規整する方策を立てることが有意義であると思う。

(広島大学助教授)